

近世農村社会における死亡構造の研究
— 死亡構造の近世的特質とその変容過程 —

杉山 聖子

一・課題と意義

本研究は近世後期から昭和期の農村社会を取り上げて、死亡構造の近世的特質とその変容過程の解明という課題の追究を試みたものである。近世後期の安芸国賀茂郡黒瀬組、または近代の広島県賀茂郡において、黒瀬と総称された地域を主要な分析対象とした。先行の諸研究に対して、本研究が持つ特色・意義は、次の通りである。

第一に、寺院過去帳を基礎史料とすることによって、近世後期から昭和期にわたり、連続した死亡者情報に基づく長期的分析を行ったことである。日本の歴史人口学研究は、宗門改帳を主な史料として進められてきた。しかし、研究者たちからは、過去帳の方が死亡記録として宗門改帳よりも有用ではないかとの指摘が出ている。死亡発生傾向の分析に関連して、宗門改帳からの情報では、近世後期の正確な乳児死亡数

が把握できない、さらに近代の死亡情報との連結が難しいといった問題をふまえての指摘である。本研究では、そうした先行研究の史料の限界を、寺院過去帳の死亡者情報を基礎に、死亡者指数という分析方法を採用することによって克服した。

第二に、近世農村における大量死亡の頻発、すなわち歴史人口学という死亡クライシスの周期的発生という事態に注目して、死亡構造分析を進めたことである。近世後期の農村社会では、飢饉や伝染病を契機として、しばしば大量死亡の発生がみられたことが知られている。しかし、死亡原因をはじめ死亡者の年齢別・男女別・月別分布など、大量死亡の実態解明に焦点を絞った研究は意外に少ない。

歴史人口学の研究者が人口動態への影響という観点から、死亡クライシスにも関心を寄せているが、個々のクライシス時の死亡実態に対する関心は必ずしも高いとはいえない。近世後期の死亡クライシスが総体として、長期的な人口動態に与えた影響を検証することが、主要な関心とされているからであろう。筆者は、近世後期の農村社会において、死亡クライシスが発生するということが自体に高い関心をもっている。そこに近世農村社会が有する固有の特質が認められると考えているからである。

第三に、近世農村社会の死亡構造において、地域差や階層

差が存在したことを意識して研究を進めたことである。周知のように、近世後期の日本社会は地域差とともに、階層差の大きい社会であった。それらが農村社会の死亡実態にも反映されて、死亡構造上の地域差や階層差が明確であったとの推論も成り立つ。さらに、死亡クライシス発生時の死亡リスク上昇についても、地域差や階層差がみられたのではないだろうか。近世・近代の死亡研究全体が立ち遅れた現状にあり、そうした死亡実態上の地域差や階層差を意識した先行研究はほとんどみられない。本研究では、死亡構造における地域差と階層差の存在を検証しようとした。

二. 主な研究成果

① 近世後期から近代における死亡構造の歴史的变化

斎藤修は、東京都国分寺市の寺院過去帳や医師の記録等を利用して斎藤（一九八七）等によって、「前近代日本の死亡パターン」が基本的には高乳児死亡と高妊産婦死亡に特徴づけられること、それは近世のみならず明治期のパターンでもあったこと、明治年間を通じて死亡をめぐる状況に大きな改善はみられなかったこと等を明らかにした。近世から近代の死亡動向について、初めてまとまりを持ったイメージが提起されたといえよう。しかし、斎藤の研究を除くと、近世から近代への連結を意識した死亡研究はほとんど進展していない。

本研究は、黒瀬の一寺院過去帳を基礎史料に、近世後期と近代との連続的分析を通じて、死亡構造の歴史的变化を明らかにしようとした。大きな成果は、乳幼児を含んだ死亡者数の推移を、先行研究に比して高い精度で把握したことである。その結果、瀬戸内内陸地域の一事例という前提はあるが、変化の道筋について、一定の仮説を提示することができた。

近世後期の死亡構造が高乳児死亡と高妊産婦死亡を特徴にするという点では、黒瀬組の場合も、斎藤の描いたイメージから大きくはずれるところはない。しかし、近代の死亡構造、とりわけ近世的な特徴、斎藤の言う「前近代日本の死亡パターン」が変化していく時期・過程については、異なるイメージが明らかとなった。

「変化の芽」は明治後期に確認でき、その変化を生んだ主要因は二つであった。第一は明治後期には、乳幼児の死亡をめぐむ状況が、大幅に改善されたこと。第二に明治後期を画期として、青年層を中心に、資本主義発展の影響を受けた新たな死亡状況が拡大したことである。

② 死亡クライシスからみた近世後期の死亡構造

黒瀬組の場合、安永元年（一七七二）から慶応三年（一八六七）までの九十六年間に於いて、平年水準から50%以上の死亡者増加が起こった高死亡率は十一ヶ年に達する。先行研

究が取り上げてこなかった西日本の農村地域においても、死亡クライシスが、十年に一回ほどといった頻度で発生していたのである。

そうした大量死亡の発生が、明治以降の近代になると、次第に減少し、やがてみられなくなった。注目すべき動きであり、近世と近代を分かち、死亡状況上の大きな変化ということができよう。こうした動きをふまえ、筆者は死亡構造の近世的特質として、死亡クライシスの発生に注目しているのである。そして死亡クライシスの実態を解明することが、近世農村社会が有する固有の特質を明らかにしていくことにもつながると考えている。そのため、本研究は死亡クライシスへの関心を共有しながらも、人口動態への影響を検証しようとする。歴史人口学の先行研究とは、かなり異なったものとなった。歴史人口学研究では、速水・鬼頭（一九八九）等のように、人口動態への影響という長期的観点から、天保飢饉を従来の研究に比べて、過小に評価するようになっていた。黒瀬組の場合も、先行研究の事例と同様、天保飢饉は近世後期の死亡クライシスの一つにすぎない。しかし地域社会への影響という観点からみれば、甚大なものがあつたのではないだろうか。天保飢饉下での大量死亡は、成人死亡者が顕著に増加するという点において、他のクライシスとは決定的に異なっていた。他のクライシスは、死亡者の数やその年齢分布からみ

れば、地域社会への影響が限定的なものにとどまったと判断される。死亡クライシスの実態解明を進めるうえで、天保飢饉に注目することはやはり重要であるといわなくてはならない。近世後期最大の死亡クライシスとして、人口動態に加え、地域社会への影響が多面的に検証されるべきであろう。

黒瀬組の死亡クライシス年においては、どの年次も何らかの伝染病が流行していたと考えられる。麻疹やコレラを始め、伝染病の原因とする死亡クライシスについて、先行研究はほとんど取り上げていない。乳幼児を含めた死亡者数把握の限界から、成人死亡者の目立つ飢饉年などに、分析が限られたためであろう。黒瀬組での分析結果からは、それぞれの伝染病特有の性質が感染者の広がりの規定し、大量死亡の実態を特徴づけるという傾向が確かめられた。常態的に乳幼児の死亡者が多いこともあって、ひとたび成人層に伝染病の流行が広がると、大量死亡の実態は極めて特徴的なものとなった。

③ 近世後期の死亡構造にあらわれた地域性と階層性

近世後期の瀬戸内農村では、畿内農村に次ぐ経済的発展がみられたといわれている。本研究では死亡クライシスの実態解明に終始して、そうした経済発展の側面、経済的先進性と死亡クライシス頻発との関連には、全く触れることができない

かった。天保飢饉下の黒瀬組について、東北農村との間に、成人層を対象に伝染病が蔓延、死亡者が急増するといった実態面の共通性を指摘しておいた。しかし、生産力・商品生産・分業関係などに格差が存在する以上、外面的には同様のも、死亡クライシスの発生・拡大の諸要因、たとえば食糧事情の悪化を引き起こす要因などは相当異なっていたと推測できる。

このことは死亡構造の地域性の解明と大きくかわる。近世後期の死亡実態の特徴として、死亡率の地域差が大きく、死亡クライシスに地域性がみとめられることは、鬼頭（二〇〇〇）のなかで、すでに指摘されている。本研究では、近世農村の死亡構造が複雑な地域性を有しており、それが各地域における死亡クライシスの発生をも規定していたことを実証した。そこで重要な課題となるのは、死亡構造の地域性を生み出す諸要因を、どのように解釈するかという問題であろう。近世後期の農村・農業構造は、非常に研究蓄積の厚い分野である。それらをふまえれば、基本的な人口変動要因としての地理的位置を重視する歴史人口学の解釈（たとえば鬼頭、二〇〇〇）だけでは充分なものとは思われない。死亡実態や死亡クライシスにあらわれた死亡構造の地域性を解明する鍵は、近世後期の経済的地帯構成など、分厚い研究蓄積のなかにもあるのではないだろうか。

さらに、死亡構造の地域性・地域差に関しては、注意すべき重要な点がある。広島藩領や庄内藩領の事例で明らかにしたように、同一藩領内の比較的狭い領域にあってさえ、死亡傾向の地域差は大きかった。本研究を通じて、筆者は、この狭い領域内での地域差の存在も、近世後期の死亡構造を特徴づける、いわば死亡構造の近世的特質の重要なものであると考えている。

そしてこの特質を生む要因の一つが、狭い地域内の死亡構造に対する階層性の影響ではないかとの仮説を立てている。つまり、村落間での農民層の分化状況、諸階層の存在形態等の違いが、死亡構造に影響を与えていたのではないだろうか。黒瀬組を事例として分析したように、上層農・下層農という二つの社会経済階層によって、死亡発生傾向は異なっていた。男女間であらわれ方に強弱があるものの、階層間格差の存在は明らかであり、社会経済階層の上下が人々の生死を左右していた。

近世後期の農村社会では、農民層の分化が進んで、諸階層の存在形態も非常に多様なものとなっていた。村ごとに階層分化の状況が異なるため、各村の諸階層が多様性を持っていたわけで、村人の死亡の様相も、また村ごとに多様で、一律ではなかったと解釈したい。

引用文献

- 速水 融・鬼頭 宏、一九八九、「庶民の歴史民勢学」新保 博・斎藤 修編『日本経済史二 近代成長の胎動』岩波書店、一六七―三二二頁
- 鬼頭 宏、二〇〇〇、「人口から読む日本の歴史」講談社
- 斎藤 修、一九八七、「明治 Mortality 研究序説―東京都下国分寺の資料を中心に―」『経済研究』第三十八巻第四号、三二―三三三頁